72.1

新連載

埋もれた婦人運動家(1) 宮嶋麗子

確たる存在でありながら殆ど忘れられているということは一個の人の生き方として一つの典型ではあるまいか――その生きざまを現代にひきよせつつ記す

秋山清（詩人）

いちずなふわっとした□

宮嶋麗子は今ではもうほとんど知られていない人である。もともと派手なところのなかった人で、生前の交友、活動、職業、生き方の何れからか、もう少し知られていてもいいように思われるが、しかしその死からもずでに三十数年がすぎ、その間に第二次大戦があった。

忘却の彼方に押しやられたとしても、彼女の生きた事実にとってそれは何ほどのことでもあるまい。ただ私は一九六六年三月の雑誌『展望』座談会「日本人の発見」で鶴見俊輔と木下順二がこんな風に語っていたことを記憶している。

鶴見　私は宮嶋資夫の細君というのは偉大な人だと思って幻想をもっているんです。会ったことはないんですが。

木下　伊藤野枝をぶんなぐった宮嶋のですか？

鶴見　ええ、宮嶋という人は、いろんな人をぶんなぐるんだ。彼は大正の末に行きづまってくるんでしょう。アナ・ボル論争で、理論的にこてんぱんにやられて、とてもまいってしまうんですよ。自分が自分の力で成長できないという感じがしてね。けっきょくアナーキズムから足を洗って坊主になるんです。仏門にはいるというときに、細君が手記を発表して「婦人公論」に出すんですが、それが宮嶋資夫の死ぬ直前に書いた「遍歴」という自叙伝のうしろについているんです。これはすばらしい女性だな。宮嶋が行きづまって坊主にならなければどうにもならないというと、パッと放してやるんですよ。その離してやり方が、倫理的でもないし、うらみつらみも何もなくて、ふわっとしているんですよ。いつでも帰ってこられるというその放し方だな。何とも言えず、私は女性的な魅力を感ずるな。

木下　それは男性からは非常に魅力的な女性だ。（笑）

鶴見　たいへんなものだ。綱の長さがね。どうでもいいんですよ。亭主はサルまわしのサルみたいなものだけれども、どんなに長くなったってかまわないんですよ。平然としている。石川三四郎さんのところに行ったときも、宮嶋資夫は細君がなくなったのでだめになっちゃったんだ、と言っていましたね。放してやった細君が、一生けんめいあとの自分の生活を立てているんです。彼女は新聞記者だったんです。大正時代の、神近市子と同時代のね。日本の職業婦人のハシリですよ。亭主が坊主になってからは、子どもをかかえて、細君は東京で貧乏な暮しをしていたわけです。――

この鶴見の意見は、事の小さな記憶ちがいを別にしてほぼ彼女を評し得ていると私も思う。そしてこれ以前、宮嶋麗子について書かれ、語られたものを私は知らない。そのように、確たる存在でありながら殆ど忘れられて

いるということは、一個の人の生き方として一つの典型ではあるまいか。彼女は、数少ない知人にとって今も強い印象をもって記憶されている。

宮嶋麗子には私も面識がないではない。しかし逢ったのは大正の終りから昭和のはじめに、住居していた牛込の若松町の古びた二階家の、その階下の一室であった。宮嶋資夫は坐って酒をのんで、傍らに乳飲子を抱いて麗子夫人が坐っていた。このはじめの時の印象が永くのこって、いつもこの夫妻はそこにそうして向き合っていたように思い出され、しかし、うわさにきいた喧嘩早い人ではなく物しずかな資夫であり、その伴侶にふさわしい存在だという思いが今にいたるまでのこっている。といっても綿入半纏のどこからか綿がはみ出ていたり、一本のキセルで夫妻が煙草をのんでいたり、生活の影はかなりに暗く見えた。そのなかで、にこやかに何かと若いわれわれの質問にこたえてくれる資夫に比べて、麗子の方はいくらかきびしい態度で、ほとんど無口に終始していたように思い出される。

昭和三年七月に『矛盾』という文芸同人誌が宮嶋資夫を中心に出はじめた。遅ればせに私もその仲間に入れてもらったが、多分私が一番年少だったかもしれない。その創刊号の巻頭に「矛盾」と題して彼はこういう言葉をかいている。

「僕等は人生を矛盾に充ちた物、矛盾そのものとさえ見るに到った。一定の教理一つのドグマに完全に自己を隷属せしめて生きる事は比較的安易である。然しながら、教理とドグマが如何に力なき物であるか。個人は常にその団体に反逆を企てている。団体と個人との関係は、永遠に謎である。と曾て大杉は云った。我々はその言葉を是認する。彼もまた、矛盾をそこに見たからである。ある時は楯を持って進み、ある時は矛を持って防ぐであろう。

僕等は矛盾しているのである。」

アナキストとして知られていた宮嶋ではあるが、この言葉からすると彼は、すでに身体の半分くらい、彼の思想的立場は移動している。人生を矛盾、ととらえようとするところに大正期のアナキズム運動に活動した彼にはないものが生れている。それはある主張と運動に自分を投げ込むにはすでに何か覚めた人間になっている。疑惑の人となっている。彼はこのときから二年後に出家したのであるが、その兆しは『矛盾』刊行のこの時期に十分現われている。私には矛盾の中に逃亡しなければならなかった宮嶋の苦悩はおぼろげにしか理解できなかった。もがきつづけるように惨憺たる、酒席などで支離滅裂の宮嶋の言動を誰が理解したか、あきらめによって彼に対するしかなかった友人、兄弟たちに一歩進めて、彼をはげまして出家することを彼に許した宮嶋麗子の生き方をそのときから、ある驚きとともに注目した。彼女がどのような人であったか、どのような生き方を資夫の出家とともに自己に課したか、おぼろげではあったが、私は遠く近くそのことを自分の心に刻んできたと思う。私が宮嶋資夫を知って四十数年、なお心を新しくして宮嶋麗子を回想するには、その生き方死に方の辛苦のなかに重く一途なもののすがすがしさにひかれるものがあるからである。

叛逆の思想と暮し□

宮嶋麗子は、宮嶋資夫にとって恋人であり、妻であり、生活と思想と活動の同志であり、それ以上に、彼の六人の子たちの母であった。麗子について、何かを語るとすれば、これらのことのあらゆる時期において、終生宮嶋資夫の救世主に他ならなかったこと。そして麗子自身資夫によって比べようもない心

身の苦を経験した人であることをつぶさに知らねばならない。日本の女の受けるべき時代の圧力、男からの圧迫とその僅かな愛情、子のための犠牲と献身、そのすべてが彼女のものであった。

宮嶋麗子、本名はうら、結婚前には八木麗子の名で萬朝報社から出ていた雑誌『婦人評論』の記者であった。婦人記者としては神近市子などとともにわが国のこの道の先達の一人である。

資夫が戦後になって書いた自叙伝『遍歴』は二人の出あいについてこう語っている。

「私はさらに書きはじめた。苦しかったが愉快であった。ただ書くことが私の窮乏に勇気を与えた。その中に私は恋をした。宮田さん(注・宮田修、成女女学校創設者)の例の哲学の会に来る、八木ウラ子という婦人だった。二人の恋は具体的にまで進んだ。市ケ谷の八幡や、月明の戸山ケ原や、向島を散歩した。——三浦岬の海事試験所に出張して記事を取りに行ったとき、時間を繰り合せて彼女は私の家に泊ったが、そんなことから母にも妹にも知られるようになってしまった。二人は別にかくす気もなかったから平然として、かえって知れ渡るほど公然となる事を喜んでいた。然し宮田さんは心配して、公然と結婚しろ、と云われた。喜んでそれを承諾した。」

その当時宮嶋資夫は牛込の神楽坂で夜店の古本屋をしており、まだ有名な処女作『坑夫』を書き上げる以前であった。結婚と同時に宮田修の世話で都新聞の市内通信員となり、夜半に警察まわりをすることになった。

麗子は宮嶋とともに、その頃大杉栄と荒畑寒村が主宰していたサンジカリズム研究会に出席していた。それは二人の結婚と前後している。宮嶋にとって彼女は、恋人であり、同時に同志だったわけである。大逆事件で幸徳らが処刑されてから四年すぎていた。大杉と荒畑が出した『近代思想』につづいて、労働者向けの月刊『平民新聞』を五号まで出したが相つぐ弾圧で中止となり、つづいて第二次の雑誌『近代思想』が企画刊行された。その前に『平民新聞』(第四号)の街頭配布ということがあった。毎号発禁という弾圧の裏をかいてその第四号は、日刊新聞に出た尾崎行雄や安部磯雄その他の論文の転載で紙面を埋めると、これを発禁にすることは流石に出来なかった。そこでその新聞を、数寄屋橋から神田、本郷と廻って道行く人に配って目をそばだたしめたが、そのとき麗子は「七月目くらいのつき出た腹の上にボール紙をぶら下げて」(『遍歴』)サンドイッチマンをつとめた。大杉、荒畑、宮嶋夫妻、百瀬晋、吉川世民、野沢重吉、山鹿泰治らがその日のメンバーであった。復活した『近代思想』(第二次)は同人としてこの他に川上真行、相坂佶、堀保子、荒川義英、古川啓一郎らがいたが、この僅かな人人がいわゆる冬の時代におけるアナキズム運動の中央的な存在であった。麗子がその一人であったことを記憶に止めている人は意外に少ないだろう。この大正四年は宮嶋夫妻にとって生涯にわたって忘れがたい年であった。

宮嶋資夫の名を文学の歴史に今にとどめる小説『坑夫』が書かれたのもこの年である。一坑夫の社会と人間にたいする憎悪と不信を描いたこの小説の生れる背後には彼の生活経験とこの前後のアナキズム運動とがあったのである。同時に新しい妻としての麗子との愛の生活があったのである。この年の五月(十三日)に麗子は長男伸を生んだ。また第二次の『近代思想』に二つの論文を発表した。その第一の「避妊と堕胎」はその当時青鞜社の人々がさかんに論じていたこの問題にたいする彼女の批判と意見であった。「原田(皐月)氏は堕胎を是認し、伊藤野枝氏は避妊を肯定して堕胎を否定し、らいてう氏はその何れを

も承認し、山田（わか）氏はその何れをも否認するのみならず、親として子を育てるに適した時以前の結婚をも否定している。然してらいてう氏を除いた他の諸氏は、避妊堕胎の原因を全て貧困—生活難に帰している。らいてう氏は貧困以外にもっと内的な或る理由の存する事を主張している。が諸氏はそれ等の理由の根本的原因に就て、何ら考察することなく、その解決法に関して、何らの考慮も費やしていない。」と仲々に手きびしい。そして「不自然な制度の下に生きて私達は正当に酬われていない。だから避妊だの堕胎だのという不自然な事もしなければならなくなる。婦人が解放された自由な生活をなし得る時は、全く新しい基礎の上に、新しい世界が現出した時でなければならぬ。」といいきっている。もう一つの「母親の悲哀」は戦争の惨禍にたいする、兵となるべき子の母の思いを、述べたものであった。

「母親のためにその子は、彼女の全生命であり、無上の喜悦であり、また矜持である。戦争はその宝を奪ってゆく。至極無造作に死の国へと投げ込んでしまうのだ。…彼女が、ようようにして我が子を一人前の男に育て上げた時、彼は護国の大任に当らねばならない。戦場には黒い大きな手が、待構えている。彼は死ぬ、それが万事の終りである。」

この文章がはるかに今私に衝撃するものは、反軍、反権力、反国家という思想とともに、この時麗子がはじめて母となったばかりという事実である。やがてきびしい生活の下で六人の子を持ち、働きぬいて、病弱のなかに死んでいった人が、恋愛し結婚し、子の母となり、その愛する者たちとの生活の日に、反逆的な思想を身につけてその主張を母の立場からさらに深く確認した者の少なかった時代に、彼女はそれを敢てした。より以上の母の情熱をもってそれに当った。運動の困難と時代の未熟に災いされながら、その以後に麗子が歩くべき道は、子の母としての生き方であり、それのまっしぐらな生涯であったことが、これらの論旨のなかに、すでに予見されている。その論旨のはげしさはあるいははじめて子を持つ母の痛切な感動にせき立てられてもいたのであろう。

アナキスト麗子□

『近代思想』が復活したとき宮嶋夫妻は東京府下調布町布田に住んでそこを発行所とした。保証金の関係である。

「母親の悲哀」を発表した大正五年には『婦人公論』の七月号に、女学校教育についての意見を平塚らいてう、神近市子、鳩山薫子らと並んで書いており、それは現実的な批評であった。「今日の女学校卒業の若い婦人は役に立たないというが、この批判は当っている。ある事物に遭遇して自分自身の思慮判断を下すことができない。これは学校で多種多様な知識を注入され、それを消化吸収して自分の血肉とする余裕がなく、発意的に研究し思想し行為する能力を欠いている。教育というものは雑多な知識を雑然と注入することでは効果は挙げられない。中途半端な知識を無秩序に詰めこまれた頭脳は、無教育な頭脳と、何らえらぶところはない。」これがその要約された見解だが、如何にも自主性を重んずるところに特長がある。知識注入よりも人間形成をという主張であり、子の母としての立場が現実的な批判をなしている。そしてこの年の十二月には二男が生れる。彼等夫妻の友人である神近市子が恋のもつれから葉山で大杉を刺したのは十一月はじめのことで、これを機会に宮嶋資夫は大杉栄と遠ざかり、しだいに運動からはなれるかに見えた。麗子も家庭の

人として、意見を発表することも多くなかった。資夫はその後大正九年に三人の子と妻を連れて叡山に上り、数ヵ月後に麗子は子供と帰京し、資夫は文学に専念して生活することを覚悟して翌年帰京してきた。そして大正十年彼は大杉栄らの「労働運動」に対抗的に刊行された「労働者」というアナキズム系の新聞に加わったりした。労働運動が勃興し、総同盟とアナルコ・サンジカリズム系の組合が対立しつつあった時期である。麗子はしだいに家庭の人として夫と子供の家に潜むごとくであった。

その時から六、七年もたった、昭和二年に「一家婦の生涯」と題して久しぶりに書いた。

「自分は十年以上もの長い間、鳴かず飛ばずどころか、よそ目には殆んどあるか無きかのかすかな存在をつづけて来た。それはほんとうに、どんな人の目から見ても、全く憐れなるべき生活であった。窮乏のどん底にうごめく可哀そうな一人の家婦の生涯。けれども自分の精神生活は過去に於ても現在にあっても、さのみプーアなものではないことを自分一人では信じている。そうして自己の存在が、他の何人かの生命に、何らか寄与するところがあったと自負している。自分は世のいわゆる快楽なるものを知らない。けれども自分は、日々の生活において、自己の職分をつくすためには、及ばずながら出来る限りの努力をしたという安心を以て、今日唯今でも、安んじて瞑目し得るだけの自信をもっている。自分はそれだけで沢山である。」（即座の感興・『婦人公論』昭二・一）

かつて街頭にまで出て活動した身を、家庭にひそめていることに、麗子が特に自負をもっているところにその時期の心境否境遇があったのだと思う。自分の職分をつくしている、自分はこれで沢山だ、という自信には、きびしい自他の批判があったことを十分思わせる。そうしてもう一段彼女はわが家庭に沈潜する。「子供のお弁当、お菜には何がよいか?」のアンケートに登場して、安成二郎夫人や三宅やす子、岡本かの子、奥むめおらと並んで、こんな答えをしている。

「人手があり、費用もおかまいなしということになれば理想的なものがいくらもありましょうが、私どものように余裕のないものにとっては、金がかからず、手数がいらず、比較的に栄養価に富んでいて、子供の嗜好に適したものでなくてはなりません。そこで主として干物や塩物、即ち塩鮭、粕漬の鮭、干鱈、粕漬の鱈、クサヤの干物、タタミ鰯、末広鰯の類を用いることになります。時には鰹節、海苔、いり玉子など——」（『婦人公論』昭二・一一）

ここにはこまごまと子供の弁当に心を配る、かつての婦人ジャーナリスト活動家、そして今は母である麗子のしずかな叫びがきこえる。もう長男次男は小学校の上級生である。長女も入学している。弁当についての細心な回答はそこからきている。それから三年、手のひら療法についてその民間の療法としての意義についての感想をかいたことがあったが、家族の中で母親が病むことの苦痛を語るに五年前に刑死した古田大次郎の手記を借りたり、その以前朴烈・金子ふみの大逆事件にかかわる所謂怪写真が政争の具にされたときには「あんなものを取立て大さわぎするとは、ましてそれを以て政争の具にするなど沙汰の限り、政治というものの正体を、見せつけられて笑止千万」と発言した。いつも彼女の社会的関心が、自主自立のアナキズム的思考を根底においていたことは殊に特長的であった。

同棲十七年、苦闘は終った□

宮嶋資夫が家を出て京都に向ったのは昭和五年の春だったが、「十月得度、十一月天竜寺に入る」とある年譜に書かれている。熾烈なその思いに彼が駆られたのは数年もっと前からである。彼は永年の精神的苦悩、現実の生

に絶望を感じつつ死をこよなく恐れる性情の人であった。そのよって来たる理由は単純には計り難いが、いつか運動をはなれ、文筆を業としながらの貧しいなりわいの中で、人生如何、の疑惑につき当り、ニヒルに身を焼きつつも現世の生の欲望にひきずられ、何か絶対的な安心を求めても求め得られぬ、そのもだえが次第に宮嶋資夫に厭世の思いを強めさせた。しかし私にはアナキスト、小説家の宮嶋の仏教的人生観とそのニヒリズムとの不協和な合成を解剖するまでの理解がない。ただ彼自身としては稀な善良性に基づく現実的な不安とある絶対性追及の思惟のアンバランスに苦しんだ結果、ともかくこの現実から自身を解放したかった、自分の心の平和だけが欲しかった、というこの幼児の泣き叫ぶにも似たわがままを、麗子は彼に許したのであった。しかし彼もまた出家して禅門に入る心境に至りつつも容易にその実行には移り得なかった。

六人の子供は君に万事たのむ、オレは坊主になりたい、これ以上無残な勝手気ままがあろうか。出家だろうと夜逃げだろうと駈落ちだろうと、捨てられる妻子にとってはえらぶところはない。だが麗子はそれを受け入れた。その年の『婦人公論』七月号に「夫を仏門に送りて」を書いた。彼に対して、これほどまでの理解と愛情に満ちた批判の言葉を見ることは私たちには今後もあるまい。

「酒に暮れ、酒に明ける狂気じみた生活、彼は自らそれを劫と呼び、難業苦業と称しました。そうした気持が彼を甘やかして、一層酒に惑溺させ、享楽生活に沈湎させたものではないでしょうか。いかにしても陶酔しきれない、歓楽への追求。まことに酒は彼のあらゆる不如意、不平不満の持って行き場であったのです。けれども単に酒に逃避し、韜晦したものとして彼をみることは出来ないのです。彼は生れながらのエピキュリアンたる素質を多分に持ち合わせていたのですから。

「没落してゆく家庭に、酒癖の悪い父、環境が時と場所との雰囲気が、一面にストイックな、一面にはドンジュンである彼をつくり上げたのです。他人には親切、世話好き、人なつっこい、センチメンタリストである彼。我儘な独断的な、エゴイストである彼。

好く言えば熱情的な、悪く言えば乱暴な、喧嘩っ早い彼。自己にもとめて得られないものを、他に強要する彼。その何れもが、彼という人間の、本来の姿でありました。

彼のうちには、不断にせめぎ、相剋するところの二つのものがあったのです。まことに彼は生れながらの受難者ともいうべきでしょう。

「不知不識の間に彼のうちには、幼時からひそかに培われた求道心が、何時か根を張り枝を茂らせ、もはや刈り取ることが出来ないようにはびこっていたのです。多年の思想的苦悩は、仏門に入ることをのみしきりに彼に欲せしむるに至ったのです。

一たびそこに思いいたると、いかにしても心を転換し得ないのが彼という男です。私もこれ以上彼とともに苦しみ、ともに悩むに堪えません。私はついに勧めて、彼に最後の決心を促したのです。

「彼は安んじて、六人の子を私の手に残して去りました。男三人、女三人の児女を私の腕一つに抱くことは、可成に重荷であるに相違ありません。けれども彼は私に、その力あることを信頼して行ったのです。

「自己の情感を、整理し統制することに、ほとんど無能力であった彼。争闘、孤立、生活の破綻は、いつもそこから起ったのです。その彼に、今や完全に孤立し得る時が来たのです。彼の発心をして、無意義に終らしめたくないと、今はただそれのみを念願している次第です。同棲十七年、お互いに第一期の苦闘は終りを告げました。」(『婦人公論』昭五・七)

この「夫を仏門に送りて」にはまたこんな生々しいことが書かれていた。

『うちの父ちゃん何処いったの?』という四歳の女の子。

『父ちゃんが早く帰るといいな』という八歳の男の子。

『父ちゃん早く帰っていらっしゃいよう!』今朝この二人の子供が、床の中で大声をあげて叫んでいるのです。彼等から父親を奪った者は私ではないか。もし私の同意がなかったら、彼は子供を残して出家することはなかったでしょう。」

この麗子の言葉は愛か。憎みかもしれない。しかしどっちでもいい。同棲十七年、お互いの第一期の苦闘は終ったという、恋愛と結婚、出産と育児、それを包む生活的困窮。その年月の中に若い日の理想をすててはしまわなかった。いろいろの不安、かさなる疑惑に混迷しながら、ともに名利の方へ傾くことのなかった彼ら。しかし麗子が生活の不如意に音をあげる女だったら、彼らだといっつ、どこで混迷する運動の枠外へ自らを放逐し、安易な道をえらんだかもしれない。あの綿の見えるどてらを着て、一本のキセルで煙草を飲みあっていた二人の風貌が永く私をとらえたには、たしかにそれだけの根拠があったと私は今にそれを思う。

そして宮嶋資夫は出家した。麗子は中学校に入った長男をはじめ六人の子を抱えてふたたび働く身となったのである。雑誌『実業之世界』の編集に携わったのであった。しかしその生活が容易でなかったことは語るまでもない。親類から多少の援助もあったかもしれないし、資夫も印税その他で協力はしたであろう。だがそれらも彼女の働きあってのものでしかなかったことは想像するまでもない。

出家したはずの資夫は、これはまた依然たる不安を自己にもち、禅門に安住しきるまでにはついに至らなかったようである。突然妻子のところへかえったり、またその家を出て別居したり、京都に行ったり、心の定まらぬ不安のままに、その時々の安堵を求める精神の放浪は「宮嶋蓬州」となっても依然たるものがあった。その時々に母を中心にして子供との必死の協力を支え合っている一家の安寧は乱されるのが常であった、と宮嶋自身が後に『遍歴』の中で述懐している。そのような事実であったのだろう。

麗子は実業之世界社に勤務しながら、たとえば草野心平など多少夫との縁故ある失業者を斡旋して働かせたりした。それくらいのことの出来る信用を得るに至ったのである。その草野心平が、いい気な詩人癖で、働かず勤めず、紹介した麗子に責任がかぶさるかと見るや、資夫はその社に訪れて彼を呼び出し、ウムをいわせず真向上段からステッキを叩きつけて、平身して詫びる草野心平を許したというようなエピソードもある。出家しても世捨人ではなかった蓬州宮嶋の存在が、ようやく麗子の健康を損ねるまでに至ったのであった。肺を痛めて中野区江古田の療養所に入り、長女とともに湯美半島に転地し、小康を得て帰京、洗足池畔に住んだが昭和十二年死去した。

宮嶋は妻の死後、「この病軀で徒らに時を過していてもならないし、死ぬとも生きるとも早く解決をつけたい気持から、行脚に出る決心をした」とかいている。

エゴイスト、ニヒリストの宮嶋資夫が、己を救うことは衆を救うことによって得られる、という思いに達したのは妻の死後大分過ぎてからである。終生彼とともに在った妻麗子を失ったことが彼のその覚醒の動機ではなかっただろうか。

尽した人、として宮嶋資夫における麗子の存在は稀有のことであろう。しかし資夫の到達は、言葉と表現はちがっても、彼の自己救済の願望が、如何に民衆が平和に生きるかの現代的課題に通じたことを自覚したとき、(自己の救済は民衆の解放に在ると確認し得たとき)、麗子とともに愛し、ともに歩んだ自主的な解放の思想に重なったであろう。麗子の献身として現われた理想主義の外に資夫はついに出でなかったのではあるまいか。